



霞台小だより

ひばり

令和6年1月9日 発行

青梅市立霞台小学校

No. 689

校長 佐藤 広明

父の仕事

校長 佐藤 広明

私が通った小学校は今思うととても不思議な学校だった。

昭和40年代、鉄の町北九州にあったその小学校は、学区全てが八幡製鉄所の社宅エリアであり、学校に通う小学生は全員八幡製鉄所社員の子どもだった。

どの友達の家に行っても同じ平屋の社宅の建物で、家のつくりは全て同じ。だれの家遊びに行っても自分の家のような気がした。

父親の仕事は全員製鉄所の現場作業員である。勤務は三交代で、朝番（朝7時ごろから勤務）、昼番（午後3時ごろから勤務）、遅番（夜10時ごろから勤務）と仕事に行く時間がシフトする。

子どもたちが遊ぶ家は決まって昼番の家で、子どもたちの合言葉は「今日はお父さん何番？」だった。それは遊ぶ時間に父親がいないことを確認するためである。朝番の家では、遊んでいるうちに父親が帰ってきて遊べなくなる。遅番の家では父親が寝ていて、子どもたちが遊ぶことは絶対に不可能であった。当時父親はどの家でも一番の存在であった。

毎年11月、こんな共通した父親の働く姿を、子どもたちが実体験できる日があった。起業祭という製鉄所の大きなお祭りである。

この日は、たくさんの出店が町中に出て賑やかになるだけでなく、製鉄所の見学ができたのである。私はこの日をいつも神妙な気持ちで待っていた。

ストリップ工場という熱い鉄の塊を薄く延ばすところで父は働いていた。この日、工場の入口に入ると、遠くに赤々とした溶けた鉄が見えた。離れていてもものすごい光と熱が伝わってきて子どもながらに危険だと察した。これ以上近づけないと感じた。

しかし、溶けた鉄のそばにはたくさんの働く男の人が見えた。母から、父はあそこにいるよ、と告げられ父を必死に探した。働く人の近くには、山に盛られた塩が置かれ、それをなめながら仕事をするんだ、とも話を聞いた。当時なぜ塩をなめるのかは、わからなかったが、溶けた鉄の熱を顔で感じながら、父の働いている姿を見ようと、心臓がバクバクしたのを覚えている。その時、近くを通った作業員が「今、日本の国で一番大切な仕事なんだよ」とやさしくつぶやいた。

その日、帰ってきた父が、いつも以上に輝いて見えたことが忘れられない。

働くことの意味や大切さを、子どもの時から理解することは大切なことです。

霞台小では5年生が起業家教育を進め、実体験をしながら学んでいますが、まずは、父や母、家族が働く姿を見せてあげること、仕事について語ってあげることが一番だと思います。将来の日本を担う子どもたちに、その想いをもたせられるのは、一番身近な家族なのです。